

地域方言の変容と多層化に関する事例研究 その2

—— 九州新幹線沿線の方言調査から ——

村 上 敬 一

1 問題の所在

本稿では、2004年春に部分開通した九州新幹線沿線の高校方言調査から「言語意識」について報告する。

九州新幹線が開通した熊本県南部と鹿児島県薩摩地方では、交通網の再編・整備がすすんでいる。人やモノの移動手段が多様化し、生活・交流圏にも影響を与えつつある。

方言区画の定説（東条1954）に従うと、熊本県方言は「肥筑方言」に、鹿児島県方言は「薩隅方言」に分類される。また、先行研究（九州方言学会1969）が指摘するように、地理的に隣接する熊本県南部と鹿児島県北部・西部の方言には類似性も認められるが、大きく「肥筑方言」と「薩隅方言」を比較したとき、両者の違いは際立つとされる。しかし、新幹線で結ばれることによって人的交流は促進され、熊本・鹿児島方言同士の直接的な接触、干渉が生じる。新幹線沿線の地域方言にも、大きな変化の生じることが予想される。

また、現代の地域方言研究は、地域的変異に注目するだけでなく、言語変化の背景にある人々の志向にも注目が集まっている。九州新幹線鹿児島ルートにおける現在進行中の言語変化の先進地として、福岡市、熊本市、鹿児島市がある。これらの都市には、さまざまな言語的背景を持つ人々が暮らし、伝統的方言の保持と標準語の浸透が複雑化している。両者の接触

による新しい語形、中間的な語形の発生と普及も顕著である。このような地方中核都市における言語使用は、標準語を志向するか、伝統的な方言を志向するかという、人々のことばの志向との高い相関が予想される。

そこで本稿では、言語形成期において、生活基盤の大きな変化を経験している高校生の言語意識に注目する。彼らの言語生活の一端を探るとともに、今後の言語変化の方向性を予測するのが目的である。

2 調査の概要

2. 1 調査の対象・実施

本稿に用いる調査結果は、平成20年度から22年度にかけて実施している科学研究費補助金基盤研究（C）「九州新幹線の開通と市町村合併にともなう九州方言の変容」の研究成果の一部である。九州新幹線沿いに調査地点を選定し、高校生（若年層）と40歳から60歳（活躍層）を対象に面接またはアンケート調査を実施中である。

ここでは、2008年の9月に熊本県立水俣高校と鹿児島県立出水高校で、2009年9月に鹿児島県立川内高校と鹿児島市立鹿児島玉龍高校で実施した調査結果を考察する。

調査には、筆者と科学研究費の共同研究者2名、および筆者担当の「社会言語学演習」受講生がたった。

2. 2 調査地域の概観

2004年3月、九州新幹線鹿児島ルート（博多～熊本～鹿児島中央）のうち、熊本県の新八代駅と鹿児島中央駅間が開通した。開通以前に4時間弱を要した博多～鹿児島間は、2時間半ほどに短縮され、当該地域における

交通アクセスの利便性が向上した。開業3年で早くも累計1,000万人を突破し、鹿児島県内から博多までの利用者の増加と、鹿児島県内の川内、出水から鹿児島中央までの短距離利用の増加が目立つようである。新幹線開通による時間短縮は、通勤・通学にも大きな効果をもたらし、その様子を変えようとしている。水俣高校では、新幹線で30分ほどの鹿児島方面への進学が増加したとのことである。

次に、各高校の所在地についての概況を記す。

水俣市は、熊本県の最南端に位置し、北から北東にかけて葦北郡津奈木町、芦北町、球磨郡球磨村、南から南東にかけては鹿児島県出水市、大口市に接し、西は八代海（不知火海）に面している。面積は162.87平方キロメートル。人口は2009年12月末日現在28,112人。

出水市は、鹿児島県の最北端に位置し、陸の三方を阿久根市、薩摩川内



九州新幹線の現状と調査地域

市、さつま町、伊佐市および熊本県水俣市に接し、北西は八代海に臨む。面積は330.06平方キロメートル。人口は2005年現在57,907人。

川内高校のある薩摩川内市は、薩摩半島の北西部に位置し、南は県都鹿児島市といちき串木野市、北は阿久根市に隣接する本土区域と、上甕島、中甕島、下甕島で構成される。面積は：683.5平方キロメートル。人口は2006年4月現在102,242人。

鹿児島玉龍高校のある鹿児島市は、鹿児島県中西部に位置する南九州の拠点都市。福岡市から南へ約280km、熊本市から南へ約180kmの場所に位置し、鹿児島県内の薩摩半島の北東部および桜島全域を市域とする。面積は547.06平方キロメートル。2009年11月の推計人口605,606人。

2. 3 調査内容

調査にあたっては、A4版で12頁の面接調査票を作成した。被調査者の属性をきくフェイスシートのほか、語彙、音韻、文法、敬語、言語意識の項目がある。

アンケート調査にも使用できるように、一部を書き込み式としたほかはほとんどが選択式である。以下に「言語意識」の調査内容を掲げる。

7 ことばに対する意識

7-1 地域のことば、ふだんの身の回りのことばから方言がなくなり、しだいに標準語化されていくことをどう思いますか。

- | | |
|------------|--------------|
| 1. いいことだ | 2. しかたがないことだ |
| 3. よくないことだ | 4. わからない |

7－2 標準語を使おうと努力したことがありますか。

1. ある 2. ない 3. わからない

1. あると答えた方 どんなとき? → ()

7－3 これから挙げる5つの都市のことばで、どこのことばに魅力を感じますか。魅力を感じる順番に () 内に数字を書いてください。

() 福岡市 () 鹿児島市 () 熊本市

() 大阪市 () 東京都

7－4 これから挙げる5つの都市のことばで、ふだんの自分のことばは、どこのことばに似ていると思いますか。似ていると思う順番に () 内に数字を書いてください。

() 福岡市 () 鹿児島市 () 熊本市

() 大阪市 () 東京都

7－5 ●●のことばは好きですか、嫌いですか。※●●は調査地点名

1. 好き 2. 嫌い 3. どちらとも言えない

7－6 ●●のことばに誇りを感じますか、恥ずかしいですか。

1. 誇りを感じる 2. 恥ずかしい 3. どちらとも言えない

3 調査結果の概観

3. 1 地域語の標準語化に対する考え

最初に「7－1 地域のことば、ふだんの身の回りのことばから方言がなくなり、しだいに標準語化されていくことをどう思いますか。」の結果(図1)からみていく。

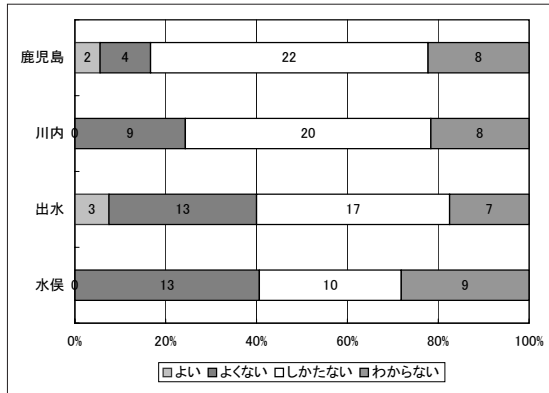


図1 地域語の標準語化に対する考え

鹿児島県の三つの高校では「しかたがない」の回答がもっとも多く、玉龍高校の22名（61.1%）が目立つ。川内高校の20名（54%）も多い。都市部を中心に周辺部も含めて、地域語と標準語や他方言との接触は、今や日常のことである。高校生は、その状況を当然のこととして受け入れようとしている。

玉龍高校では「よくない」とする否定的な意見も4名（11.1%）でもっとも少ない。地方中核都市としての性格を持つ鹿児島市には、大都市ほどではないにせよ、県内外の各地から人が集まる。都市生活の多様化、複雑化に伴い、周辺地域と比べて、地域語の衰退と標準語化の進行を否定することがより難しくなっているということであろう。

水俣高校のみ「よくない」の回答が13名（40.6%）と、もっとも多くなり、出水高校も13名（32.5%）で、県内3校の中では多くなっている。このことは3. 2で述べる。

3. 2 地域語に対する好悪

次に「7—5 ●●のことは好きですか、嫌いですか。」の結果（図2）をみていく。

「好き」の回答がもっとも多いのは出水高校で、24名（61.5%）、次いで多いのは水俣高校の20名（57.1%）となっている。3.1でみたように、地域語の標準語化について否定的な意見が多かったことと、相関がありそうである。玉龍高校も「好き」の回答が20名（55.6%）と多い。このことは、3. 3で述べる。

かつて筆者は、瀬戸内海中部の「しまなみ海道」沿いの高校で同様の方言調査を実施し、地域語に対する評価について結果をまとめたことがある（村上2005, 同2006）。これらによると、この地域の高校では、地域語に対するマイナス評価がプラス評価を大きく上回った。単純な比較ではあるが、南部九州の高校生における地域語への愛着も指摘できそうだ。

川内高校のみ「好き」が18名（48.6%）「どちらともいえない」が19名（51.4%）で拮抗する。川内高校に限らず「どちらともいえない」の回答

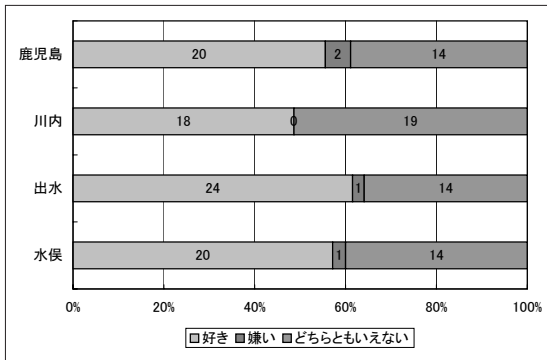


図2 地域語に対する好悪

は、他の3校でも30%台半ばから40%と、決して低くない割合を示している。同一の言語でも、どの側面に注目するかでその評価も変わってくる。使用者、使用場面、言語の内的な特徴など、さまざまな側面を考慮しながら地域語に対する評価を下していることがうかがえる。

3. 3 地域語に対する誇り

ここでは「7—6●●のことばに誇りを感じますか、恥ずかしいですか」の結果(図3)をみていく。

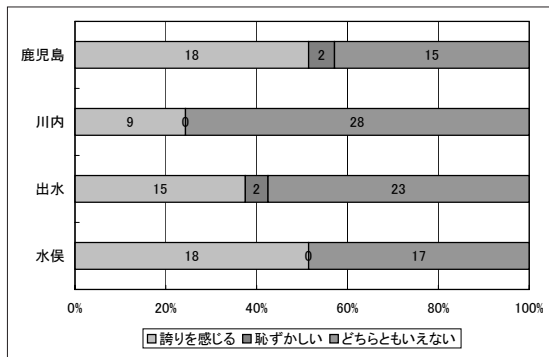


図3 地域のことばに対する誇り

「誇りを感じる」の回答が多いのは玉龍高校と水俣高校で、ともに18名(51.4%)となっている。いっぽう「どちらともいえない」の回答も水俣高校で17名(48.6%)、玉龍高校で15名(42.6%)と拮抗する。この回答は、川内高校で28名(67.9%)、出水高校で23名(57.5%)と高くなっている。相対的に「誇りを感じる」の回答は、それぞれ9名(32.1%)と15名(37.5%)と低い。

3. 2の結果以上に、ここでは中立的な「どちらともいえない」の回答

が際立っている。「地域語に対する好悪」については、地域語そのもののさまざまな側面を考慮して判断されたが、「地域語に対する誇り」については、標準語との比較によって判断されたことがひとつの理由であろう。標準語と比較したときの地域語の持つ負のイメージは、高校生に「誇りを感じる」ことを妨げているようである。このことは3. 4 おいて具体的に述べる。言語以外の側面、例えば、文化面、経済面といった社会的な側面も、ここでの判断に少なからず影響があっただろう。

3. 4 標準語を使おうとした努力

3. 4. 1 標準語と対比したときの地域語

標準語と比較したときの地域語の持つ負のイメージは「7－6 標準語を使おうと努力したことがありますか。」の回答(図4)にみることができる。この設問では、使おうと努力したことが「ある」と回答した場合、その具体的な事例を自由記述で回答することになっている。

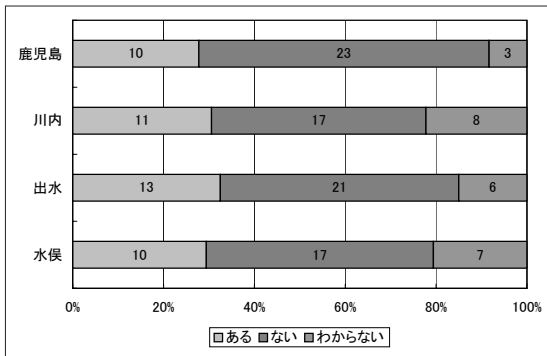


図4 標準語を使おうと努力したことがあるか

「ある」と回答したのは、どの高校でも30%前後で、際立った地域差は

みられない。

それでは、高校生にとっての標準語とはどのようなものなのか。約3割の、標準語を使おうと努力したことのある回答者の、その具体的な場面、経験を以下の自由記述回答からみてみよう。まず、地域語の負の側面を勘案することで標準語を使おうとしたものを、回答通りに列挙する。

- ・自分が田舎者と思われたくないとき
- ・もともと住んでいる地域自体がとてもなまりのある地域なので、
鹿児島本土の方や他県ではほとんど変えて使っている
(筆者注：この回答者は離島出身)
- ・方言言った時、バカにされるかなと思ったから

これらの記述には「田舎者」「なまり」「バカにされる」といった表現で、地域語のマイナスの側面が具体的に描き出されている。鹿児島や熊本の高校生に限ったものではなく、いわゆる「地方」と称される全国各地において、同様の意識は少なくないだろう。地域語を標準語と対比したときの典型的な負の要素、ある種の劣等感が背景にある。

次に掲げるものは、地域語が標準語に劣っている、といったような具体的な表現はない。しかしながら「東京」「都会」といった表現は、間接的、相対的に地域語を「田舎のことば」とする意識を表している。

- ・東京などに旅行に行ったとき
- ・東京に行ったとき
- ・都会に行ったとき

- ・都会のお店で

地域語が、文字通りある地域限定のことばであるという意識は、以下の表現に表れている。首都圏や関西圏などの大都市圏では、「県外」や「他県」といった感覚はどの程度意識されているだろうか。地域語が県単位で意識されていることを、これらの回答は示唆している。

- ・県外に行ったとき
- ・他の県の子と話したとき
- ・鹿児島の人じゃない人と話すとき
- ・鹿児島を出て、標準語を聞いたとき
- ・他県から来た人に案内や説明をするとき
- ・出かける時
- ・県が違う人と話している時
- ・他県の友人や先輩、初めて会った人
- ・鹿児島の人が全国ニュースのインタビューに答えているのを見たとき

3. 4. 2 場面差からみた地域語

次に、自由回答の中から場面の違いによる使い分けに言及したものを列挙していく。

- ・先輩や先生と話すとき
- ・年上の人と話すとき

- ・目上の人の中で
- ・電話の時か、知らない人と話す時
- ・知らない人と喋る時。
- ・改まった場で話すとき
- ・面接のとき
- ・みんなの前で発表するとき
- ・発表、スピーチをするとき
- ・発表会の劇でセリフを言うとき
- ・部活の歌詩読み・面接

「先輩」「先生」「年上の人」面接などで接する「知らない人」に対する場面は「改まった場面」として意識され、標準語を使うべきという意識がみえる。また、学内での「発表」場面も、標準語を使用すべき場面として考えられている。「標準語を使おうと努力したことがある」という回答は、全体の30%ほどにすぎないが、高校生のころから、地域差と場面差を意識しつつ、標準語と地域語を使い分けていること、使い分けようとする意識があるのは確かである。

3. 5 各地のことばに対する意識

ここでは、今後の言語変化の方向性や、場面による標準語と地域語の使い分けの状況を予測するひとつの手段として、各地の言語に対する意識をみていく。取り上げる具体的な都市名は、県庁所在地の鹿児島市と熊本市、九州の中心、拠点都市としての福岡市、関西の中心としての大阪市、そして日本の中心、東京都である。

3. 5. 1 各地のことばに対する魅力

図5は「7-3 これから挙げる5つの都市のことばで、どこのことばに魅力を感じますか。」の回答結果である。魅力を感じる順番を（ ）内に数字で回答することで、それぞれの都市のことばに対して、魅力を感じる順に1から5の数字が回答される。ここでは、第1位と第2位の回答を合算して表示する。

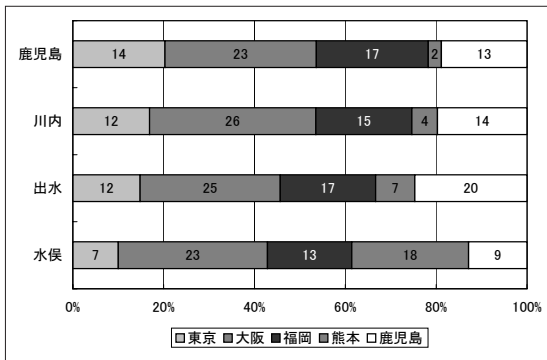


図5 各地のことばに対する魅力（第1位+第2位）

いずれの高校でも「大阪に魅力を感じる」という回答がもっとも多くなっている。若年層の関西方言志向は、全国各地で報告されているが、今回の調査でも同様の結果となった。実際の言語使用、言語形式としての関西方言についての受容については、稿を改めて言及したい。

2番目に多い回答では、玉龍高校と川内高校で東京と福岡、地元の鹿児島が拮抗する。先述の通り、地域語に対する好悪、誇りについてプラス意識を持つ傾向が指摘された玉龍高校と、中立的な意識を持つ傾向にあった川内高校であるが、東京のことばに対する魅力については、似たような傾向をみせる。福岡のことばに対する魅力は、新幹線開通による心理的距離

の短縮、九州における拠点都市としての、福岡の経済的、文化的な影響が背景にあるだろう。新幹線の全線開通後は「魅力がある」とする回答が増加する可能性を含んでいる。

出水高校と水俣高校では、大阪に次いで県庁所在都市の鹿児島、熊本に魅力を感じるという回答が多い。出水市は鹿児島市から、水俣市は熊本市から、離島を除いてもっとも離れた市である。県単位でみたとき、最周辺部にある地域としての共通現象といえるか。出水高校は、隣接県の熊本市が最下位であるのに対して、水俣高校では東京都が最下位となる。東京志向については、傾向が異なる。

3. 5. 2 どこのことばと似ているか

図6は「7-4 これから挙げる5つの都市のことばで、ふだんの自分のことばは、どこのことばに似ていると思いますか。の回答結果である。ここでも、第1位と第2位の回答を合算して表示する。

いずれの高校でも、それぞれの県庁所在地に「似ている」とする回答がもっとも多くなっている。これは当然の結果であろう。

2番目に多い回答では、玉龍高校で東京の回答が15人で、隣県の熊本を上回る点が注目される。実際の言語使用において標準語が目立つようであれば、鹿児島市の標準語使用が東京志向に支えられていることが明らかになるだろう。川内高校、出水高校では、隣県の熊本市方言を似ているとする回答が2番目に多く空間的距離に比例するが、3番目は東京で、福岡市は4番目である。東京のことば（標準語）の方が、福岡市方言よりも近いと意識されている。水俣高校では福岡市が2位で、3位以下は東京、大阪、鹿児島がほぼ並んでいる。熊本県方言と福岡市方言は同じ肥筑方言に属す

るが、高校生の意識では、空間的距離の近い鹿児島市よりも同一方言区画に属する福岡市方言に近いものとなっている。この点、川内高校、出水高校と異なる。

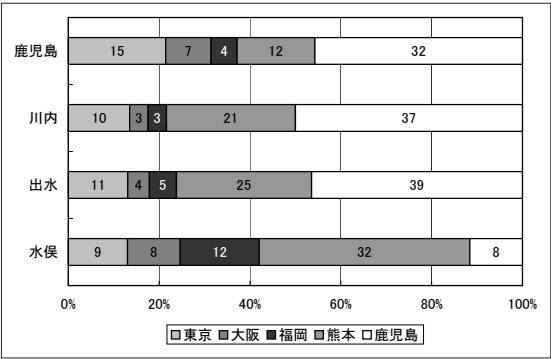


図6 どこのことばに似ているか（第1位+第2位）

4 まとめ

本稿では「九州方言新幹線沿線グロットグラム調査」から、水俣高校、出水高校、川内高校、鹿児島玉龍高校における言語意識の調査結果の一部を報告した。調査結果をおおまかに表示すると以下ようになる。

	地域語の標準語化	地域語への好悪	地域語への誇り	標準語使用の努力
鹿児島	しかたない	好き	感じる／どちらとも	ない
川内	しかたない	どちらとも／好き	どちらとも	ない
出水	しかたない	好き	どちらとも	ない
水俣	よくない／しかたない	好き	感じる／どちらとも	ない

	魅力ある都市のことば	似ている都市のことば
鹿児島	大阪、福岡、東京	鹿児島、東京、熊本
川内	大阪、福岡、鹿児島	鹿児島、熊本、東京
出水	大阪、鹿児島、福岡	鹿児島、熊本、東京
水俣	大阪、熊本、福岡	熊本、福岡、東京

今回の調査対象とした高校生は、1992～3年ころの生まれである。日本社会は飽和期を迎えるとともに、いわゆるバブル崩壊から、低成長、景気悪化の時代へと転換してきた時代である。ことばの面ではマスコミの発達や、教育の高水準化、高学歴化などによって、伝統的な方言、地域語の衰退が進み、昔ながらのことばを話す高年層との接触経験が稀になってきた時代である。言語形成期（5～15歳ころ）には、学校教育やテレビからの標準語を身につけ、日常生活では、家族や友だちから標準語の影響を大きく受けた地域語に触れてきた、という背景を持っている。このような背景を持つ今回の被調査者は、地域語の標準語化を「しかたない」ととらえる傾向が強かった。このことは地域語における標準語の浸透を当たり前のこととしてとらえている結果であろう。

また、彼らの言語形成期には「地方の時代」ということが言われてきた。大都市圏の成熟、飽和にともなう、地方の良さを見なおす動きである。ことばづかいの面では、かつて方言が「恥ずかしい」「隠すべきものだ」とされた東京で、女子高生が、全国各地の方言を形式だけ取り入れて真似をする時代になった。友だち同士、家庭での情的なコミュニケーション言語としての方言のよさが見なおされ、方言に対して好感を持つ高校生の多いこともわかった。

「地域語に対する誇り」は、今後のさらなる地域社会の変容と連動していくものと考えられる。日本社会自体が停滞し元気を無くしているいっぽうで、新幹線や高速道路などのインフラの整備によって都市と地方の平準化も進んでいる。ことばの面では、都市部のことばに対する地域語の引き目、負の側面が意識されるいっぽうで、標準語と地域語の使い分けの意識が明確な高校生も多い。今後の言語変化を予測するにあたり、今回の調査

結果は、標準語や地域語、地域の中核都市のことばによって、地域言語の多層化現象がますます促進されることを示唆している。

付 記

本研究は、科学研究費補助金基盤研究（C）「九州新幹線の開通と市町村合併にともなう九州方言の変容」の研究成果の一部である。

参考文献

- 金沢裕之（1991）「言語意識と方言」『新・方言学を学ぶ人のために』世界思想社
- 九州方言学会編（1969）『九州方言の基礎的研究』風間書房
- 真田信治（2007）「発話スタイルと方言」『シリーズ方言学 3 方言の機能』岩波書店
- 柴田 武（1995）「言語地理学と社会言語学の間」『日本方言研究会第60回研究発表会発表原稿集』
- 陣内正敬（1996）『地域語の生態シリーズ九州篇 地方中核都市方言の行方』おうふう
- 陣内正敬（2007）「若者世代の方言使用」『シリーズ方言学 3 方言の機能』岩波書店
- 東条 操編（1954）『日本方言学』吉川弘文館
- 日高水穂（2001）「ことばとイメージ」『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界思想社
- 村上敬一他（1998）『九州におけるネオ方言の実態』科研費成果報告書
- 村上敬一（2005）「芸予諸島高校生の関西方言に対する意識・イメージー広島・愛媛県境域高校調査よりー」『文林』39 神戸松蔭女子学院大学・短期大学学術研究会
- 村上敬一（2006）「芸予諸島高校生の自方言に対する評価と他方言に対する意識ー広島・愛媛県境域高校方言調査よりー」『文林』40 神戸松蔭女子学院大学・短期大学学術研究会
- 村上敬一（2008）「香川県東讃地域における高校生の方言意識」『文林』42 神戸松蔭女子学院大学・短期大学学術研究会